

チシマザクラ (実) などが見られる。林床ではチシマザサが疎生し、ツルシキミ (実)、オオバスノキ (花)、ホツツジ (蕾)、ミヤママタタビ、ミヤマハンショウヅルなどの低木・つる植物と、エゾオオサクラソウ、エゾノイワハタザオ、ヒエスゲ、ショウジョウバカマ (以上、実)、セイタカスズムシソウ、ヤマブキショウマ、アキカラマツ (以上、花)、ケルマユリ、ツリガネニンジン、ミヤマナルコユリ、トウゲブキ、ミヤマワラビ、ナライシダなどの草本が比較的豊富に認められる。山頂に近づき林床に岩が露出してくるにつれて、マルバキンレイカ、ホソバヒカゲスゲ、ダイモンジソウ、ウシノケグサなどの草本類 (岩隙・岩礫地植物) が出現し始める。

山頂付近に新第三紀安山岩の柱状節理が発達した小規模な崖地がある。この崖地には、イワキンバイ、ミヤマアズマギク、レブンサイコ、エゾヤマコウボウ (以上、花)、ミヤマハタザオ、ヒメスゲ (以上、実)、アサギリソウ、チャボカラマツ、カワラボウフウ、キジムシロ、エゾキリンソウ、ヒモカズラ、タカネノガリヤスなどの草本類と、エゾシモツケ、コケモモ、ハイマツなどの若干の低木類が生育している。これらは、低い標高に出現した高山植物、または崖地に特徴的な岩隙・岩礫地植物である。

黄金山は、近隣の暑寒別山塊や樺戸山地とともに、植物地理学 (植物の分布) の上で重要な山岳である。山麓には、道南からこの地域に隔離分布するイカリソウや、道南から日本海側を北上してほぼ北限となるサワフタギなどが見られる。一方、山頂の崖地では比較的多数の高山植物が見られる。このような特色を持つ植物相とそれらを包含する植生 (植物群落) が永久に残されるべきである。しかしながら、黄金山を含むこの地域は、なお植物の研究が不十分であり、あちらこちらでリゾート開発が話題になっている。会員の方々には、単に植物名を知るだけでなく、各地域の特色ある植物 (植物相または植生) に関して保護と開発の問題に厳しい眼を向け続けて頂きたいと考えている。

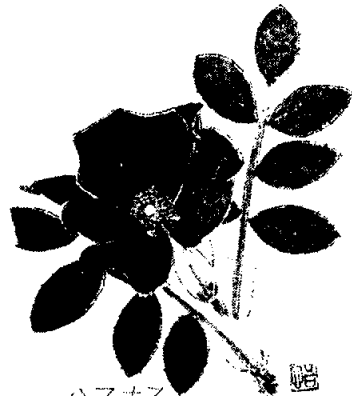
## 原 松次先生

金 上 由 紀

原先生に、幼い頃はどんな少年だったのかとお尋ねしたことがある。すると先生は「僕は臆病でしてね。女のクサツタ奴といわれたこともあるよ」と、飄々と答えられたので、一同大笑いになったが、その内気な松次少年が採集した植物で胴乱を一杯にして、牧野富太郎先生宅を訪ねると、牧野先生は縁側に新聞紙を広げ一点一点丁寧に教えて下さったという。今も忘れられない思い出だろう。

花の名を知る喜びには恋に似たときめきがある。「これなあに」と問えばたちどころに教えていただける原先生との花散歩は、すばらしい映画を見終った時のような余韻がいつまでも残る。同じ花の名を幾度聞き返しても決して嫌な顔をされない寛大な原先生だが、御自身には実に厳しく、僅かな衰えを理由に全てのフラワーガイドを昨年で辞めてしまわれた。目下幾冊ものフィールドノートの整理に没頭されている。たった一人で『北海道植物図鑑』を作る決心をされてからの10年は、50ccのバイクで全道を駆け回り、我ながらよく勉強したと思われる程熱中されたという。

私も又意気地のない子どもであったが、今も最大の喜びを突然断ち切られて、一人で森にわけ入る情熱も勇気も持てないまま、只途方に暮れている。



ハマナス  
*Rosa rugosa*